

# 日本書紀を

## 訪ねて

### 神代編

### 国生み

#### 沖縄県多良間島

サンゴ礁が囲む浅瀬には、直径数センチの岩塊が、いま転がってきただような不安定な姿で点在していた。沖縄県先島諸島・多良間島に残る、太古より幾度となく押し寄せた津波の痕跡である。

島唯一の集落外れのフクギ林に、島の始祖とされるフナシエー兄妹を祭るウガム(拝所)がある。その先がウイネーツツと呼ばれる丘だ。「ここは津波発生時の避難場所でもあります」と、多良間

村立図書館の桃原光盛司書(66)が言った。始祖伝説とは、津波にまつわる次のようなものである。

はるか昔、南方から大波が来た。

兄妹はこの丘に逃げ、シユガリカギナという植物にしがみついて2人だけ生き残った。根の強さから力芝とも呼ばれるイネ科の雑草のことである。夫婦となった兄妹に最初に生まれたのはヘビとトカゲ

だった。次にシヤコ貝、次に布の原料である芋麻。そして、ようやく人間が生まれた。

今年成立1300年となる日本書紀に、これとよく似た神話が取められている。イザナキとイザナミの国生み神話だ。津波の描写こそないが、兄妹を連想させる男女が大海の中の小島で夫婦となり、初めは子作りに失敗する。同書は「一書に曰く」として、蛇のような子が生まれたとしている。

「くにうみ」伊弉諾と伊弉冉が、天浮橋から天之原を海原に差し下ると、矛先から滴り落ちた潮が固まって産駒島ができた。二神は島に降り国土を生もうと夫婦の交わりをした。おやまあ、かわいい少女よ。「おやまあ、いとしい少男よ」。こうして大日本豊秋津洲(本州)、伊予三名洲(四国)、筑紫洲(九州)など大八洲国が生まれた。「巻第一 神代上より(あらまし)」





# はるかな島へ続く 心の古層



◎島の北海岸に点在する津波石。1771年の大津波では住民の1割にあたる362人が溺死した記録がある(小型無人機から) ◎津波から逃れ島の始祖となった兄妹を祭るアナジャーウガム

夫婦と為り、先づ姪児を生きたまふ。偶ち軍船に載せて流しやりき。次に淡洲を生む。此も児の數に充れず(夫婦となり、まず姪児をお生みになった。この子はすぐに葦の船に乗せて流し棄てた。次に淡洲を生んだ。これもまた子の數には入れない)

ヤマトから1500年以上、歴史的にも長く隔絶していた島に、なぜ類話が伝わっているのか。実は兄妹を始祖とする伝説は久高や伊良部、波照間など琉球弧の島々から東南アジア、ポリネシアにかけて広く分布している。沖縄特有の父系の血縁集団「門中」にも、祖先神として兄妹を祭っている例が見られる。赤嶺政信・琉

球大名菅教授(民俗学)は、伝説で子作りに初め失敗するのは、タブーである近親婚をしたためと指摘。それでも始祖が兄妹とされたのは、かつて沖縄にあった、姉妹が兄弟を靈的に守護するという信仰が投影されたものとみる。

琉球王国時代、王族の女性が最高神女たる聞得大君に就いたことは知られている。赤嶺さんは日本書紀に見えるイサナキとイザナミ、天照大神と素戔嗚尊、あるいは魏志倭人伝が伝える卑弥呼とそれを補佐した弟との関係に注目、「律令国家成立で神社祭祀が整う以前の古代日本にも、同じような信仰があったのではないかとみる。南島の伝説は、日本人の心の古層とはるかな故郷について、手がかりを与えてくれるのだ。

多良間島では今も、ニサイガッサ、ツカサという男女の神役が年中行事を執り行う。ニサイガッサをかつて務めた津嘉山次生さん(79)によると、アナジャーウガムには旧暦8月8日の朝、豊作と村民の健康をお祈りしている。残念なこと、今や若い島民の多くは伝説を知らないそうだ。「だって、人間からヘビが生まれたと言っても、理屈に合わないでしょう」

信仰は薄れ、かつて島の畑に多くあった津波石も土地改良で姿を消したが、兄妹の命綱となったシュガリガギナだけは道端で、まぶしい日差しを浴びて褐色の穂を揺らしていた。(池田和正)

読み下し文と現代語訳は小学館「新編日本古典文学全集」から

\* 「日本書紀を訪ねて」は「史書を訪ねて」と交互に火曜日

## 深める

## 淡路海人集団が伝承か

日本書紀は、神代から持統天皇(在位690〜697年)までを扱う漢文・編年体の歴史書で、舎人親王らの撰により、奈良時代初の養老4年(720年)に完成した。律令国家が編んだ六つの正史(六国史)の第一にあたる。

全30巻のうち巻1、2が神代。和銅5年(712年)に成立した古事記と比べると、日本書紀は出雲神話の分量が少ない一方、本文のほかには八十一書に日

くVとして数多くの異説も収録しており、天皇家の神話に、諸氏や地方に伝わる神話伝説を取捨選択しながら体系化していった過程をたどることが出来る。

イサナキ、イザナミの国生みについて日本書紀は、本文と10種類の異説を収め、その多くは淡路洲(兵庫県・淡路島)が第一に生まれたとする。このほか同書にはイサナキの幽宮が淡路にあったとする記事や、「淡路の海人」が応神天皇や即位前

の仁徳天皇に仕えていたという記事もあることから、この神話は淡路の海人集団が伝承しているものと考えられている。

淡路島とその周辺には、国生みの伝承地のほか、海人が生業としていた古代の製塩遺跡が確認されている。国生みに先立ち、二神が茅で海原を探り、潮が固まって磯取島ができる場面は、製塩の過程で、土器中の海水をかき混ぜる作業との関係が指摘されている。





イノと呼ばれる遠浅の磯池内で見られる崖石の奇観。はるか昔、沖合から流されてきたサンゴの塊だ（沖縄県多良間村で）―田中勝文撮影

【アクセス】  
 宮古空港（沖縄県宮古島市）から多良間空港まで飛行機で20分。空港から乗客まではバスが運行している。

